

ドメスティック・バイオレンスと伝統主義

— アメリカ先住民コミュニティにおける援助者のDV解釈枠組み —

桑 島 薫

近年、アメリカ合衆国の都市やアメリカ先住民保留地では、DV問題に取り組む先住民コミュニティが増えている。その代表が、サウスダコタ州のパインリッジ保留地（オグララ・ラコタ・ネーション）である。同保留地では、1980年代後半から始まったDVへの取り組み過程において、DVの発端を植民地支配に置き、解決法に先住民の伝統回復を掲げる特徴的な解釈枠組みが、先住民援助者達により様々な媒体を通じて産出されてきた。

本研究では、このDV解釈枠組みに注目し、それを把握するため、ミネソタ州ドゥルース市とパインリッジ保留地にある先住民団体の資料を基に、報告と考察を行った。その結果、以下のことがわかった。

この解釈枠組みにおいて、今日のDV問題は民族の被植民地化の歴史として解釈され、先住民の経験するDVと先住民のアイデンティティは深く絡み合うものとして表象されている。援助者達は、植民地主義を告発し、先住民の伝統的信念体系の回復を唱える一方で、主流社会と共通する社会資源を取り入れつつ実際の問題解決に携わっている。特にパインリッジでは、援助者達の提唱するトライブ（部族）のDV防止法や刑司法制度の設立は、オグララ・ネーションとしての利害関心とも一致した。これらの先住民援助者が提示するDVの解釈枠組みにおいてDVへの対応は、伝統の回復、脱植民地化、主権確立という、先住民社会全体を包摂する営みとして位置づけられている。

キーワード：ドメスティック・バイオレンス、アメリカ先住民、援助者、伝統、解釈

1 本研究の位置づけ

はじめに

女性に対する暴力は、世界各地で起きている最も深刻なジェンダーの問題の一つである。中でも夫や恋人など親密な関係にある(あった)男性から女性への暴力は、「ドメスティック・バイオレンス」(以下、DV)と呼ばれ、社会的関心を集めている。

DVに対しては、各国で民間及び政府による取り組みがなされており、とりわけ「白人」中産階級を中心としたアメリカの主流社会におけるDV事情は日本へも紹介されている(ニッキーシー&ディヴィッドソン NiCarthy & Davidson 2000; ドメスティック・バイオレンス国際比較研究会 2000他)⁽¹⁾。アフリカ系、ヒスパニック系、アジア系、アメリカ先住民⁽²⁾などいわゆるエスニック・マイノリティの経験するDVの実態も、主流社会と同様、或いはそれ以上にコミュニティの大きな問題となっているが、アメリカにおける様々なエスニック・マイノリティのDVに関する研究はまだ、少ない(Yoshioka et al. 2003: 171)。

本研究ノートでは、日本ではほとんど知られていないアメリカ先住民コミュニティ⁽³⁾におけるDVをテーマとして取り上げ、DV問題に対処する際に提示される先住民援助者⁽⁴⁾の伝統主義的な解釈枠組みについて、資料調査を基に報告と考察を行う。要約は以下の通りである。

DVへの取り組みを行っている代表的な先住民コミュニティでは、援助者達による伝統主義的なDVの解釈枠組みが提示されてきた。伝統主義的な先住民援助者は、現在起きているDVは先住民に対する植民地支配の暴力であると解釈し、先住民のDVと先住民のアイデンティティは深く絡み合うものとして表象している。さらに、DVの根本的解決とはすなわち、先住民の伝統的な信念体系の再構築、植民地支配からの脱却、先住民自治の確立という、先住民社会全体を包摂する大きな営みであると位置づける。援助者達がアメリカ主流社会から自らを差別化し「独自性」を謳う一方で、実際の活動では、主流社会と共通する刑司法制度やアドボカシーシステム⁽⁵⁾を取り入れ

ている点にも、筆者は注目する。

情報が不十分である先住民のDVに関しては、実態の解明と対策の拡充が急務ではあるが、現場でDV問題の解決に携わる先住民援助者の理解や実践を把握することにより、アメリカ主流社会や日本社会におけるDVをめぐる支援文化を相対化する視点を得たいと考え、本研究ノートでは援助者に着目した。先住民女性の暴力被害について筆者の把握しているデータは以下の通りである。

アメリカ司法省の調べでは、先住民女性が暴力被害を受ける率は全米女性人口の被害率の2倍以上である (Perry 2004 : v)⁽⁶⁾。1995年から1996年にかけて、無作為抽出の男女各々8千人に対して行われた「女性に対する暴力に関する全国調査 (National Violence Against Women Survey)」では、「レイプかつ／または身体的暴行を受けた」と回答したアメリカ先住民⁽⁷⁾の女性は64.8%おり、他人種の女性達よりもその数値は高い (Tjaden & Thoennes 1998 : 5)。先住民女性がDVに遭う率は、白人女性のそれより高いという別の全国調査⁽⁸⁾ (1985年当時)の報告もある (Bachman 1992 : 101)。バックマンは家庭内暴力に関するこの全国調査を基に、年間最低2万9千人の先住民女性が暴行を受け、うち6千件は妻殴打であると推計している (Bachman 1992 : 107)⁽⁹⁾。

アメリカ先住民の経験するDVに関する調査も不十分であり、それらの調査はサンプルが限定され、システムティックな調査手法に欠ける (Chester et al. 1994 : 251)。今のところ、全トライブを網羅したDVに関する実態調査はなされておらず、保留地のトライブ別 (Kuklinski & Buchanan 1997; Hamby & Skupien 1998) や先住民コミュニティ (Shinkwin & Pete 1983; Durst 1991)、保留地や僻地のシェルター (Bachman 1992; Feinman 1992; Krishnan et al. 1997)、健康・職業・教育のサービス機関 (Norton & Manson 1995)、医療機関 (Fairchild et al. 1998; Malcoe et al. 2004) などの調査があるが、その数は多くない⁽¹⁰⁾。これら先行研究からは、DVが先住民コミュニティの問題として関心を集めつつあることが伺えるが、もちろん、援助者の活動実践やDV解釈について取り上げた研究は目下のところ、

見当たらない。

1-1 背景

英米で起こった女性に対する暴力反対運動は、女性を抑圧する男性優位のイデオロギーを告発し、社会変革を目指すフェミニズムと結びついてきた。その文脈では、「伝統」はしばしば家父長制と密着しているとされ、非難される⁽¹¹⁾。しかし、先住民援助者達は、先住民の歴史的な文脈において現在のDVを解釈し、根本的な解決法として先住民の「伝統」の回復を掲げる。DVという現象が、ここではアメリカ主流社会とは異なる語彙や枠組みで語られている。先住民の女性運動家達は、女性の問題をアメリカ先住民の社会的コンテクストにおいて捉える。つまり、彼女達の主張は、家族、インディアン・ネーション、母なる大地という文脈で行われるのである (Valencia-Weber & Zuni 1995: 91)。

近年、アメリカの都市部や先住民保留地⁽¹²⁾では、深刻化するDV問題に取り組む先住民コミュニティが増えている。そこでは、浄化儀式や踊りなど伝統的慣習の一部を援助実践へ取り入れるものから伝統的な信念体系の再構築を目指すものまで、様々である。「伝統」の内容は先住民トライブ⁽¹³⁾やコミュニティ毎に差はあるが、DVという社会問題に先住民の「伝統」を関連づける構図は共通している。

そもそもそのような枠組みが現れ出てきたのは先住民自身によるDVへの取り組みの過程においてであった。ここではその代表例として、サウスダコタ州パインリッジ保留地に住むオグララ・ラコタと呼ばれるトライブの女性達が中心となって進めてきたDV介入・防止プログラム (Artichoker & Gullicksen 2003) を取り上げる。

様々な媒体に散見される彼女達のメッセージを一言で言うと、「先住民コミュニティで起きているDVは植民地化によって『白人』から持ち込まれた家父長制が原因であり、その根本的解決は、女性は『神聖』であるという先住民の伝統的な信念体系を取り戻すことである」というものである (Cangleska n.d.; Artichoker&Gullickson 2003; Sacred Circle 2003 他)。

実際には、先住民が親密な関係において受ける暴力被害のうち約70%は他人種からという報告 (Greenfeld & Smith 1999 : vi)⁽¹⁴⁾ があるが、この援助者達は、DVの加害者を先住民男性、被害者を先住民女性と想定し、DVを「先住民女性への暴力」として捉え、解決に携わっている⁽¹⁵⁾。

1-2 調査方法

DVの解釈枠組みを把握するデータとして、様々な媒体に掲載された先住民援助者達の発言や記述を網羅的に収集し、論文や報告書、支援団体の発行するハンドブック、マニュアル、ポスターを一次資料として用いた。さらに、データを補足するため、2004年7月26日～8月5日にかけて、ミネソタ州ドゥルース市に拠点を置く先住民支援団体の Mending the Sacred Hoop Technical Assistance Project (MSH-TA) とサウスダコタ州パインリッジ保留地に拠点を置くDV介入組織Cangleska Inc.を訪ね、資料と情報の収集を行った⁽¹⁶⁾。事前調査により、この2団体が様々な媒体を通じ、DVに関する伝統主義的な解釈を産出していることを把握していたからである。

MSH-TAは1991年に設立し、ミネソタ北部にある保留地の先住民のDV加害者及び被害者の支援や、全米の先住民援助者を対象とした情報提供や研修を実施している。スタッフは大多数がオジブウェ・インディアンを出自とする (Balzer et al. 1999 : 1)。

Cangleska Inc.は、パインリッジ保留地にあるオグララ・ラコタ・ネーションの認定を受けたトライブのDV介入組織で、コミュニティにおける活動を担っている。トライブのDV防止法の作成にも関わった。非先住民数名を含む36人の男女スタッフ⁽¹⁷⁾ がおり、保留地内外で2カ所のシェルターを運営し、加害者矯正プログラムやコミュニティの啓発にも力を入れている。さらに、全米の先住民援助者やトライブ関係者を対象とした情報や研修を提供する Sacred Circle と呼ばれるプログラムを展開している。

入手した資料を検討した結果、DVの解釈枠組みを捉えるのに重要と思われる次の3点、すなわち、「先住民の伝統とDV」、「植民地支配とDV」、「解決法」が構成要素として浮かび上がった。以下、パインリッジ保留地におけ

るDVへの取り組みについて説明した後、これら3点に沿って考察する。

2 パインリッジ保留地におけるDVへの取り組み

パインリッジはサウスダコタ州にある9つの連邦保留地の一つで、その中にオグララ・ラコタ・ネーションがある。全米で2番目の広さ(270万エーカー)を持つこの保留地には3万9千人が住むが、生活は厳しく、世帯の平均年収は4,000ドル未満で、失業率とアルコール依存症率が共に約85%と推測されている⁽¹⁸⁾。パインリッジはまた、19世紀末に300人以上の先住民が白人騎兵隊によって虐殺された「ウンデッド・ニー」⁽¹⁹⁾で有名な所でもある。

1970年代中頃に英米で起こった「バタードウーマン運動」がそうであったように、アメリカ先住民コミュニティ⁽²⁰⁾でも、草の根の女性達が、暴力の被害を受けた女性を支援し始めた(DeBruyn et al. 1990 : A-3)。先住民の健康や福祉を担当するはずの連邦政府部局からはDV被害者を対象とした援助サービスはなく、地元の女性達の努力のみに頼るところが多かったという(DeBruyn et al. 1990 : A-3)。

先住民女性のための最初のシェルターは、ある先住民女性活動家の働きかけをきっかけに、1977年にパインリッジに隣接するローズバッド保留地に創られた。地元の女性達は暴力を受けた女性のために安全な場所を提供し、White Buffalo Calf Women's Societyというシェルターを開設した(MSH-TA 2003 : 5)。

パインリッジでも80年代後半からDV防止の取り組みが始まった。1986年、地元の人々は、女性に対する暴力の問題について話し合う機会を持った。138人が集まった会合では、「加害者男性の義務的逮捕が必要だ」という意見や、「女性が神聖な存在だという理解へ戻ろう」という声が上がったという(Ybanez n.d. 2001 : 18)。

1989年に「配偶者虐待防止法(Spouse Abuse Code)」がオグララ・トライブ議会を通過し(後に「ドメスティック・バイオレンス防止法(Domestic Violence Code)」に改正)、同年、サウスダコタ州のDVコアリション⁽²¹⁾と

共同でコミュニティを対象としたDV撲滅プロジェクトが始まった。さらに、同プロジェクトはトライブ組織へと発展し、1995年、トライブ議会の承認を得て、オグララ・ラコタ・ネーションのDV介入・防止を担う非営利組織のCangleska Inc.として設立した。

先住民の文化に配慮したCangleskaの活動をアメリカ司法省は「実証プロジェクト (demonstration project)」(Artichoker & Gullickson 2003:3)と位置づけ、パイリッジは今では先住民を対象とする包括的なDV介入で全国的に知られる。

Cangleska はシェルター (1997年開設) の運営ほか、加害者の保護観察、コミュニティのDVに対する意識啓発を目指した活動を実施している⁽²²⁾。Cangleskaが運営するSacred Circleは、トライブ警察、トライブ裁判所の判事や検事、アドボケート、加害者プログラム担当者などへ、研修やノウハウを提供する。これまで全米の150トライブ以上がSacred Circle主催の研修に参加した。Sacred Circleは、連邦政府の定める全国5カ所のDVリソースセンターの一つに認定され、DV介入プログラムを評価する全国調査で「有望な活動」(Edmunds et al. 2002:20)として紹介されている。

先住民コミュニティで創られてきたDV対応の社会資源には、主流社会と共通するものと先住民独自のものとがある。前者は、加害者逮捕と被害者保護を規定した刑司法制度や、シェルター、アドボカシー、カウンセリングなどであり、後者は、スウェットロッジ (sweat lodge)⁽²³⁾ と呼ばれる浄化儀式、トーキングサークル、スマッジング (smudging)⁽²⁴⁾ などで、主に被害者女性へ提供されている⁽²⁵⁾。

スウェットロッジは多くのトライブが実践しており、そこは、スピリチュアルな支えの中で、自分の気持ちを吐露し、泣き、祈り、正直に何でも話せる安全な空間だと、ある先住民女性は説明する⁽²⁶⁾。DV被害者の癒しのために取り入れられるスウェットロッジやトーキングサークルは、主流社会に見られる、当事者が語り合い、体験を共有することで、回復を目指すセルフヘルプグループと似た機能を持つことが指摘できよう⁽²⁷⁾。

3 先住民援助者のDV解釈枠組み

先住民援助者らの提示するDV解釈枠組みは、先住民に対するステレオタイプ、偏見、差別への異議申し立てであると同時に、先住民コミュニティ内部へ向けた社会変革のメッセージでもある。

この特徴的な解釈枠組みが出てきた背景には、先住民が主流社会から受けてきた被差別の長い歴史があった。マスメディアに「野蛮」と描かれてきただけでなく、先住民に対する偏見は公式な場でも発言されている。1990年、サウスダコタ州の区画についての公聴会で、当時の州政府の担当者は、先住民文化を暴力やアルコール、犯罪に満ちた病理的社会とみなし、先住民の「推進する悪から我々のコミュニティと近隣を切り離す」(Smith 1999:41)⁽²⁸⁾ため、先住民女性のためのシェルターの開設許可要求を退けた。

サウスダコタ州の先住民女性支援の先頭を切っていたアーティチョーカーはこの公聴会に出席していた。女性達は彼女を中心に、申請却下に不服を申し立て連邦裁判所で裁判を起こしたが、先住民側は敗訴した⁽²⁹⁾。(公聴会と同年の11月に開催されたアメリカ人類学会で、アーティチョーカーらは“*It's Not Cultural*” ([DVは我々の]文化ではない)というペーパーを発表している。)この後90年代に、パインリッジ保留地におけるDV介入及び被害者の支援活動が進んだ。

だが、先住民による対抗的な応答は、以下に見ていくように、先住民の伝統文化を「女性の神聖性」「平和的」「補完的な男女役割」として本質化したものになっている。

3-1 先住民の伝統とDV — 「DVはインディアンの伝統ではない」

先住民援助者達は「DVはインディアンの伝統ではなかった」という。例えば、筆者がミネソタ州ドゥルース市のMSH-TAで入手したポスター⁽³⁰⁾には、一人の先住民女性の写真と次の文章が掲載されている。

私の祖母はリーダーとして尊敬されていた。私は髪の毛をつかまれ引き

ずられている。祖母は一人の女性として敬われた。私は殴られ貶められている。祖母はバランスの世界に生きた。私は混乱した世界に生きる。祖母の仲間は彼女を護り、尊敬した。私の仲間は彼が私の顔を踏みつける間、背を向けた。

そして、ポスターには大きく「暴力は我々の伝統ではない」と書いてある。先住民の伝統社会において「DVが不在あるいは稀であった」ことの根拠として、「女性の神聖性」「女性の中心的地位」「男女の補完関係」が挙げられる。さらに、伝統社会には「抑止力」（社会的制裁、親族の目、兄弟・叔父の介入、タブー）と「逃げ場」（母系制、妻方居住、離婚の自由）が存在したとする。この説明は、人類学者のキャンベルが用いた「制裁と聖域 (sanctions and sanctuary)」（Campbell 1999）という概念に該当する。

MSH-TAは、女性の神聖さについてのウィニバゴ・インディアンの伝承を紹介している。

「息子よ」、あるウィニバゴの父親が諭した。「おまえの妻を決して虐待してはいけない。女性は神聖である。もし妻を虐待し、その人生を惨めなものにしてしまえばお前は早死にするだろう。我々の偉大な祖母 (Grandmother)、大地は女性である。妻を悪く扱うことは、大地を悪く扱っていることだ。そのように振舞えば、それは間違いなくお前の祖母を虐待していることになるだろう。我々を生かしてくれているのは彼女 (She)なのだから、お前がそのように振舞うことは、自分を殺すことになるであろう」(MSH-TA 2004:24)。

「女性の神聖性」については、トライブ政府としての公式発言にもみられる。トライブの自治政府が集まって組織するアメリカインディアン全国会議 (National Congress of American Indians)⁽³¹⁾ は、2003年の総会で採択した決議の中で、西洋との接触の影響が先住民の「女性を敬う」価値観を破壊し、今日のコミュニティに蔓延するDVや性虐待を引き起こす原因を作った

とコメントする⁽³²⁾。同会議は、今日のDVや性犯罪は連邦政府の無関心にも責任の一端があるとし、先住民女性を保護するという条約の履行を求め、非暴力的な環境を形成する鍵は「女性の神聖性」の保持にあるとみなしている。

先住民援助者らの説明によると、「女性の神聖性」は生命の与え手ということに由来する。「母なる大地」は女性であり、多くのトライブのスピリチュアルな教えは「女性 (feminine)」原理に基づくと言う (Artichoker & Mousseau 2003:7)。ゆえに、女性が神聖とみなされた伝統社会では、現在言うところのDVは起こり得なかったと説明する。

また、「女性の中心的地位」や「男女の補完関係」についても、先住民に伝わる逸話や、先住民の土地管理や離婚に関する法学研究、文化人類学者による民族誌の記述を、伝統社会におけるDV不在あるいは稀であったことの根拠として提示している (Hill n.d.:3; Ybanez n.d.:1 他)。

3-2 植民地支配とDV

筆者が行った文献調査によると、「植民地支配とDVの関係」についての説明は、大きく以下の3点に分けられる。第一に、植民地支配と今日の先住民の周縁化された社会経済状況との関係(①)、第二に、先住民を取り巻く周縁化された社会経済条件と今日の先住民社会におけるDVの高発生率との関係(②)、そして第三に、DVと植民地支配との直接的関係(③)である。簡単に示すと、「植民地支配 — ①先住民の周縁化 — ②今日のDV」となるが、この一連の流れにおいて、援助者達の解釈枠組みは全てを含みながらも「植民地支配 — ③今日のDV」の直接的な関係を強調する。

植民地支配とDVとの関連については、「寄宿学校 (boarding school)」と「内面化された抑圧 (internalized oppression)」の2つに焦点を当てて考察する。援助者達のDV解釈枠組みにおいて、この2つのトピックは各々独立した、しかし密接に関連し合うものとして頻繁に登場する。「寄宿学校」は先住民が暴力を「学習した」空間として説明され、「内面化された抑圧」は、白人の家父長的価値観を先住民が自らのものとした経験の総称として用いら

れている。

(1) 「寄宿学校」で学習した暴力

寄宿学校制度は先住民の子供の同化目的で実施され、1879年に最初の学校が開校し1970年代まで続いた (Coker 1999:24)。寄宿学校の経験は「決してそれについて話すことができなかった、話すことを妨げる、言葉にできない空虚感があった」(Balzer et al. 1999:61) と、あるオジブウェ・インディアンの女性 (66歳) は語っている。30代後半のオジブウェ男性は、自分の家族や親族の男性達がレイプされた寄宿学校での経験に、今の性虐待の根源を疑う。

私はあの寄宿学校とやらに入れられた。8歳の時、私は神父にレイプされた。我々、みんなされた。男の子みんなだ。それは、あの孤児院、あの寄宿学校にいるということの一部だった。私の叔父達も父親にもみな、それが起こった。それが普通だと思っていた。家族全員、そうされたから。(中略) たぶんそれが理由で、私の家族はみんながそうなんだろう。政府が我々子供達をあの学校へ入れたなんて知らなかった (Balzer et al. 1999:61)。

「寄宿学校」は、文明化された生き方とキリスト教に基づく価値観を教え込むはずの場所であった。だがそこでの経験は、男女共に暴力という「白人の文化」を継承するものとなったと援助者達は言う。

前出のMSH-TAは、「寄宿学校は100年以上にわたって行われた連邦の制裁実践」(MSH-TA 2003:4) だと断罪し、ネイティブ・フェミニストのアレンは、寄宿学校で教育を受けた何百万人という先住民が、「子供虐待という、最も恐ろしい英欧の文化的側面を借り受けた」(Allen 1986:xiii) と批判する⁽³³⁾。

キリスト教に基づく教育の名目で創設された寄宿学校は、先住民に懲罰という身体への暴力をとおして、暴力を振るうことを学習させる装置

となったと、援助者達は解釈する。

(2) 「内面化された抑圧」 — 不可視の白人

先住民援助者達による植民地主義告発に必ずといってよいほど登場する「内面化された抑圧」は、支配者（白人）の抑圧的な価値観を被支配者が自分の内へ取り込み、自然なこととして振舞うようになることを意味する。Cangleska は、「内面化された抑圧」について次のように説明する。

我々の自己への嫌悪（内面化された抑圧）が増加するにつれて、暴力一般も増えました。男性同士や女性に対する暴力に加え、女性同士や子供や老人に向けられる暴力も増えました。これが、抑圧者がコントロールを保つやり方です。外から来る必要はありません。なぜなら我々は自分達自身でそうするからです（Cangleska n.d.）。

「インディアンは汚く、恥ずべき存在」で、「女性と子供は男性の所有物である」という白人の価値観が先住民自らの価値観となった今、それは先住民から先住民に向かう暴力、つまり「水平的な暴力（horizontal violence）」（Sacred Circle 2003：15）を生み出すという。

白人が直接、先住民に暴力を振っているわけではなく、白人の価値観を「内面化」した先住民が先住民に暴力を振っていると彼女達は説明する。つまり、支配者である白人の望むコントロールは、白人の姿が見えなくとも、被支配者の内側から発動して実現し続けるというのである。

Cangleska のある先住民女性のディレクターは「ウンデッド・ニー」に言及して次のように語る。

あの男達⁽³⁴⁾（中略）のスピリットはまだここにいます。インディアンの男達をとおして生きています。〔女性と子供を〕人間として扱わず、貶め、モノのように扱うその態度や信念、行為をとおして……（Ybanez n.d.：11）。

彼女は、女性を支配しようとする加害者の行為の中に植民地主義は今なお生き続けていると言う。実際に妻や子供に暴力を振るっているのは先住民男性であるが、そのスピリットは先住民のそれではなく、植民地主義で譲り受けた白人男性のスピリットだとする。

「内面化された抑圧」は「平和な伝統社会」というメッセージと共に、先住民を取り巻く現状は本来の姿ではないことをコミュニティに認識させようとする。つまり、DVの原因は先住民にあるのではなく、植民地主義による「内面化した抑圧」の結果、起きているというのである。今日のDVにあっては、先住民が自分達のコミュニティを自ら破壊するよう仕向けられており、それはすなわち現在にまで続いている植民地主義だと、援助者達は非難するのである。

3-3 解決法——主流社会モデルとの接合

先住民援助者達は、DVの根本的解決の方法として社会変革を掲げる。MSH-TAの発行したアドボケート対象のマニュアルは、社会サービスではなく社会変革 (Social Change) を目指すべきだと明記している (MSH-TA 2004:40)。Sacred Circleの使命は「ネイティブ女性への抑圧を正当化する、個人及び制度的な信念を変革すること」(Sacred Circle 2003:2)であり、その鍵は先住民の「伝統」にあるとする。

大切なことは、私たちの過去を検証し、私たちがどこにいたのか、どうやって私たちが今日の位置へと至ったのかを理解し、今日の問題への解決方法が私たちの [大文字の] 伝統 [Traditions] に見出せることを称賛する [celebrate] ことです (Artichoker & Mousseau 2003:4)。

彼女達はDVの解決法として、伝統的な先住民の信念体系の再構築という長期的ゴールを目指しながら、短期的にはDV当事者へ今必要とされる支援を提供する、二段構えの姿勢をとっている。

援助者達は、加害者を刑法で厳しく取り締まって被害者の安全を確保する

という、現実的な対応が必要なことも認識している。援助者とのインタビューからも明らかのように、是が非でも「伝統だけで対処しようとしているわけではない」⁽³⁵⁾。伝統回復を目指す一方で、主流社会の対応モデルを先住民の言葉に翻訳して取り入れながら⁽³⁶⁾ 眼前の現実的ニーズに対応しており、そのことを彼女達自身、自覚しているのである。

4 考察とまとめ

本稿では、アメリカ合衆国の都市や保留地の先住民コミュニティで、DV撲滅を目指して活動する一部の先住民援助者達の一連の特徴的なDV解釈の枠組みを取り上げた。この解釈枠組みは、DVの発端を植民地主義に据え、根本的解決には先住民の伝統的な信念体系、すなわち「女性の神聖性」の再構築を呼びかけるものである。最後に、この解釈枠組みにおける「女性の神聖性」の回復と植民地主義告発という2つの特徴について簡単に考察したい。

「女性は神聖であった」「女性が中心的役割を担っていた」という言説は、象徴的にも機能的にも女性を高く位置づけている。しかしながら、「女性の神聖性」や「女性の中心的役割」は、それらを政治的かつ社会経済的に支える社会の網の目の中であってこそ機能していた。女性の役割が高く評価されていたとされる先住民伝統社会とは異なり、現在の資本主義経済の下では先住民女性が担う家事育児の価値は低い。今では選挙制によるトライブ議会が政治を司り、コミュニティに関する議題は男性が中心となって意思決定する。社会経済構造は現状のままで、「女性は神聖である」「DVは我々の伝統ではない」と連呼したところで、キャッチフレーズ以上になり得るのかという疑問がわく。さらに、トライブの伝統が均一ではなかったとする立場からの批判のとおり (Hamby 2000 : 656)、西洋との接触以前、DVは存在しなかったという援助者達の解釈は、男性からの暴力が伝統的に存在してきたトライブにとっては受け入れ難いものであろう。

しかし、「女性の神聖性」という理念が現代に実現し得るかどうかは問題ではないのかもしれない。「女性の神聖性」や「DVは我々の伝統ではない」

というスローガン自体が人々の意識に働きかけ、行動変容のモメントを生む可能性は十分にあると考えられるからである。援助者達の提示するDVの解釈枠組みが流布すること自体が、DVへの対策になっているともいえる。

また、アルコール依存でも自殺でもないDVという社会問題であるからこそ、先住民の別の伝統的観念ではなく、「女性の神聖性」が選択されたのであろう。アルコールや自殺問題の文脈で伝統を称揚する援助者であれば、「女性の神聖性」ではなく別の伝統概念を選ぶと想像できる。

次に、植民地主義についてであるが、先住民援助者達にとって、DVは現在に続く植民地支配であり、DVの根絶は植民地支配からの脱却を意味する。先住民社会において、脱植民地化と主権確立は誰も疑義をはさむことのないテーゼであり、コミュニティのDV問題を主流社会に頼ることなくトライブ主導で対処することは、トライブの自治にとっても重要である。

既存の主流社会によって提供される社会資源に内在する差別、偏見を、先住民達は嫌という程経験してきた(McIntire 1988)。だが、連邦認定のトライブであればトライブ法の制定が可能である。パインリッジの事例に見たように、先住民女性のためのシェルターを創り、トライブのDV防止法を制定することは、偏見や差別のない社会資源の提供とトライブの主権確立という2つの大きなメリットをコミュニティにもたらす。援助者達の働きかけで実現した、DVに関するトライブの司法システムの整備が、主権を最優先させるオグララ・トライブ議会の利害と合致したことがこのケースの成功要因の一つであったといえよう。今後、この伝統主義的な解釈枠組みは、全米の先住民コミュニティへと広がって行くのか、あるいは、パインリッジへ一点集中化していくのか、現段階ではわからない。

本稿で言えることは、伝統主義的な先住民援助者のDVの解釈枠組みは、先住民の経験するDVを民族の歴史的な文脈に位置づけ、DVという一事象を超えて、植民地主義告発、伝統の回復、トライブの主権確立をも含む大きな営みだということである。先住民援助者にとってDVを語ることは、先住民であることを語ることであり、先住民のDVと先住民のアイデンティティの問題は切り離せないものとして表象されている。

だがその反面、トライブの政治的関心へとDVを位置づけるこの解釈枠組みでは限界があることも事実である。

先住民と他民族との男女関係や、伝統的に父権制のトライブにおいては、援助者の用意する均一的な「伝統」の回復と植民地主義批判という物語に、自分の経験を重ね合わせることができない者も多いだろう。また、アメリカ先住民の経験するDVも他の社会と同様、単純ではない。様々な要因と重層的に絡み合っている個別のかつ多面的なDVの姿を捉えることは、マクロな社会構造に主眼を置く立場にとっては難しい。

筆者自身は、日本でDV被害者の援助実践に関わりながら、今後は、日米社会においてDVの周りに繰り広げられる支援文化について考えていきたい。この研究ノートはそのための一ステップとしたい。

(くわじま かおる 東京大学大学院総合文化研究科)

〔注〕

- (1) 日本で開催されるDV関連のシンポジウム、自治体や市民団体の視察報告書等でもアメリカ主流社会に関する情報は紹介されている。
- (2) 2000年の国勢調査では、約250万人がアメリカインディアンまたはアラスカ先住民と申告した (U.S.Census Bureau 2000)。本稿ではアメリカインディアンに焦点を当て、引用箇所以外では「アメリカ先住民」または「先住民」とした。
- (3) 本稿の言うコミュニティとは地理的かつ／または人的ネットワーク的な共同体を意味する。
- (4) 自らが先住民であり、かつDV被害者の援助活動や加害者プログラムに携わっている者を指す。本稿では「先住民援助者」または「援助者」と記した。先住民対象の支援活動に従事する非先住民も当然いるし、伝統主義的な解釈枠組みを共有する男性の先住民援助者もいるが、本研究の考察対象である伝統主義的な発言や記述の主な担い手は先住民女性である。彼女達の学歴、年齢、部族背景は様々で、元DV被害者が援助者になったケースも少なくない。
- (5) 被害者の立場にたつ、権利擁護のための全面的な支援活動のしくみ。「アドボケート」はそのような活動をする人々を指し、専門的な位置づけにある。
- (6) 必ずしも先住民男性から先住民女性への暴力ではない。
- (7) アメリカインディアンとアラスカ先住民を含む。

- (8) 1985年のNational Family Violence Resurvey。
- (9) バックマンは1985年全国調査のアメリカインディアン204家族のデータを基にした。
- (10) Hamby & Skupien, Shinkwin & Pete, Kuklinski & Buchananの論文はハンビーがレビューしているが(Hamby 2000), 未発行もしくは日本で入手不可能なためハンビーから孫引きした。
- (11) 「伝統」という言葉で何を指すかは文脈において異なるが、西洋社会における「伝統としての妻殴打」(Dobash & Dobash 1979:242)や、「フェミニスト的視点はパートナーの虐待を、伝統的な性別役割分担への期待や、家父長社会における男女間の歴史的に不均等な力関係を基盤に、説明しようとする」(Chornesky 2000:486-487)という記述から、アメリカ主流社会のフェミニズムの中には、「伝統」は暴力を生み、永続化させてきたものとして批判対象とする理解があることがわかる。
- (12) 合衆国にはIndian Reservationと呼ばれる連邦認定の保留地が314ある(Russell 2000:62)。
- (13) 先住民の部族。本稿では先住民自身が使う「トライブ」を用いる。合衆国には連邦認定の559のトライブがある(Russell 2000:56)。元来「トライブ」とは、社会的、政治的、宗教的に組織された血縁関係にある人々の集まりで、ある領土に居住し、共通の言語を話す人々を指した(Russell 2000:55)。
- (14) 男女別のデータではない。
- (15) 本稿で扱うDVの解釈枠組みは、基本的に、先住民男性から先住民女性への暴力を想定したものである。
- (16) ミネソタ州ドゥルース市のMSH-TAを訪問(2004年7月26日)後、ミネアポリス市にて同団体主催の、先住民性虐待被害者のためのアドボカシー研修(Sexual Assault Advocacy Training: The Principles of Advocacy)に参加(7月28~30日)。研修には全米から非先住民を含む男女約20名が集まった。また、同州セントポール市のMinnesota Indian Women's Resource Center(7月27日)とシェルターのWomen of Nations(7月28日)も訪問した。さらに、サウスダコタ州ラピッドシティ市のSacred Circle(8月2日)、同州パインリッジ保留地のCangleska Inc.(8月3~5日)を訪ねた。
- (17) スタッフの大多数はDVを経験した女性達で、高卒から修士号取得者までいる。(2004年8月2日、Sacred Circle事務所にて、アーティチョーカーより。)
- (18) ここでの情報はYbanez(n.d.)を基にした。
- (19) 「ウンデッド・ニーの虐殺」とは、1890年12月29日、パイリッジのウンデッド・ニーと呼ばれる場所で、当時は禁止されていたインディアン達のゴーストダンスが行われると聞きつけた白人騎兵隊により、300人以上のインディアンが虐殺された事件。この事件を以て、約300年にわたった入植者とインディアンの戦いは終結したとされる。今では記念碑が立ち、多くの先住民や観光客が訪れている。

- (20) Apache, Lakota, Pawnee, Keresan(Pueblo), Ojibwa, NezPerce, Salish, Potowatomi, Omahaのトライブが例として挙がっている。
- (21) サウスダコタ州の反DV組織で、先住民に特化したものではないが、先住民女性活動家がコアリションの設立に関わるなど、先住民との関係は以前よりあった(Artichoker & Gullickson 2003:3)。
- (22) 具体的な活動内容は Artichoker and Gullickson (2003)を参考されたい。
- (23) スウェット・バスとも呼ばれる。焼けた石をテントに運び入れ、水をかけて蒸気を出す。祈りと歌が順番に繰り返され、タバコを詰めたパイプが回される。
- (24) セージ(西洋ヨモギ)などの「聖なるハーブ」を燃した煙で全身を清める。
- (25) ほか、ヒーリングサークル、パウワウ(歌、踊りの社交の場)、パイプセレモニーへの参加を行う所もある。加害者男性にも、自らの行為を悔い改め気づきを得るために踊りや儀式への参加が推奨されている。
- (26) 2004年7月30日、アドボケート研修参加者の話より。
- (27) セルフグループは多様な領域にみられ、規模や内容も異なるため一般化できない。それゆえここでは暫定的な考察に留まる。
- (28) Smithは、“Discrimination and the Double Whammy,” Lake Andes, South Dakota: Native American Women’s Health and Education Resource Center, 1990:2-3〔原文ママ〕から引用している。原文は、“a matter of keeping our〔我々白人の〕community and neighborhood away from that evil that you〔インディアン〕and your ideas promote”。
- (29) 本人との電話での確認による(2005年1月4日)。本人の承諾の上、掲載した(他の引用箇所も同様)。
- (30) 女性と子供に対する暴力撲滅を目指した調査や研修を行う非営利団体Praxis Internationalが、アメリカ司法省の「女性に対する暴力委員会」の協力を得て発行した。
- (31) 1944年に設立。現在、約250のトライブ政府メンバーから成る。
http://www.ncai.org/About_Us.8.0.html (2006年4月30日最終確認)
- (32) 2003年6月18日の総会での決議(PHX-03-034)。http://www.ncai.org/ncai/data/midyear2003_tmp/phx-03-034.pdf (2006年4月30日最終確認)
- (33) しかし、「学習された暴力」については先住民援助団体の中からも反対の意見がある。DV及び性暴力の被害者を支援するNative American Circle, Ltd.は、先住民が白人からのみ暴力を学習したとする見方を疑う(NAC Ltd.2001:Sec.1-48)。
- (34) ウンデッド・ニーでインディアンを虐殺した白人の騎兵隊。
- (35) 2004年8月4日。パインリッジにて、アーティチョーカーより。MSH-TAの研修でも、同様の意見が聞かれた。
- (36) 例えば、ミネソタ州ドゥルース市のDV介入プロジェクトが作成した、身体的暴力と非身体的暴力の関連を図式化した「パワーとコントロールの車輪」のモデルを用いているが、^{パワー}輪は先住民にとって平和の象徴であるため、三角形の図に修正している。

[引用文献]

- Allen, Paula Gunn 1986 *The Sacred Hoop*. Beacon Press Books.
- Artichoker, Karen and Marlin Mousseau 2003 *Violence Against Native Women is not Traditional — Handbook*. Brenda Hill (ed), Sacred Circle.
- Artichoker, Karen and Verlaine Gullickson 2003 *Raising Public Awareness on Domestic Violence in Indian Country*. National Resource Center on Domestic Violence.
http://www.vawnet.org/NRCDVPublications/TAPE/Papers/NRCDV_Cangleska.pdf
 (2006年4月30日最終確認)
- Bachman, Ronet 1992 *Death and Violence on the Reservation: homicide, family violence, and suicide in American Indian populations*. Auburn House.
- Balzer, Roma et al. 1999 *Full Circle: Coming Back to Where We Began*. Mending the Sacred Hoop, Minnesota Program Development Inc.
- Campbell, Jacquelyn C. 1999 Sanctions and Sanctuary: Wife Battering within Cultural Contexts. Dorothy Ayers Counts et al. (eds) *To Have and To Hit*, 261-285, University of Illinois Press.
- Cangleska n.d. "Examining Why There is Violence Against Native Women," Excerpts from Men's Re-education Curriculum, Cangleska Inc. P.O. Box 638, Kyle, SD57752.
- Chester, Barbara et al. 1994 Grandmother Dishonored: Violence against women by male partners in American Indian communities. *Violence and Victims*, 3: 249-258.
- Chornesky, Alice 2000 The Dynamics of Battering Revisited. *AFFILIA: Journal of Women and Social Work*. 15(4): 480-501.
- Coker, Donna 1999 Enhancing Autonomy for Battered Women: Lessons From Navajo Peacemaking. *UCLA Law Review*, 1: 1-111.
- DeBruyn, L. et al. 1990 'It's Not Cultural' Violence Against Native American Women. *Full Circle: Coming Back to Where We Began*, Appendix A1 - A 7. Paper prepared for the 89th American Anthropological Association Meeting, New Orleans, Louisiana, November 30, 1990.
- Dobash, R. Emerson and Russell Dobash 1979 *Violence Against Wives*. The Free Press.
- ドメスティック・バイオレンス国際比較研究会 2000 『夫・恋人からの暴力』 教育史料出版会
- Durst, Douglas 1991 Conjugal Violence: changing attitudes in two northern Native Communities. *Mental Health Journal*, 27(5): 359-373.
- Edmunds, Christine et al. 2002 Violence Against Women: A Review of Impact and Practices.
http://www.washburn.edu/ce/jcvvs/research/violence_against_women/full.pdf
 (2006年7月2日最終確認)
- Fairchild, David G. et al. 1998 Prevalence of Adult Domestic Violence among Women Seeking Routine Care in a Native American Health Care Facility. *American Journal of Public*

- Health*. 88(10): 1515-1517.
- Feinman, Clarice 1992 Women Battering on the Navajo Reservation. *International Review of Victimology*, 2:137-146.
- Greenfeld, Lawrence and Steven Smith 1999 *American Indians and Crime*. U.S. Department of Justice, Office of Justice Programs. February 1999, NCJ 173386. <http://www.ojp.usdoj.gov/bjs/pub/pdf/aic.pdf> (1999年6月18日改訂, 2006年7月2日最終確認)
- Hamby, Sherry 2000 The Importance of Community in a Feminist Analysis of Domestic Violence among American Indians. *American Journal of Community Psychology*, 28(5): 649-669.
- Hill, Brenda n.d. *From the Roots Up, An Overview of Shelter and Advocacy Program Development Supporting Women's Sovereignty*. Sacred Circle.
- Krishnan, S.P. et al. 1997 Documenting Domestic Violence among Ethnically Diverse Populations: Results from a Preliminary Study. *Family & Community Health* 20(3): 32-48.
- Malcoe, L.H. et al. 2004 Socioeconomic Disparities in Intimate Partner Violence Against Native American Women: a cross-sectional study. *BMC Medicine*.
<http://www.biomedcentral.com/content/pdf/1741-7015-2-20.pdf> (2004年5月24日掲載)
- McIntire, Marcie 1988 Societal Barriers Faced by American Indian Battered Women. *Women of Nations Newsletter*. St. Paul, Minnesota.
- Mending the Sacred Hoop-Technical Assistance Project (MSH-TA) 2003 The Evolution of Domestic Violence and Reform Efforts Across Indian Country. *Mending the Sacred Hoop Technical Assistance Project Introductory Manual 2003*, MSH-TA.
- 2004 *Sexual Assault Advocacy Training: The Principles of Advocacy*. Mending the Sacred Hoop, July 28-30, 2004. Minneapolis, Minnesota.
- Native American Circle, Ltd. (NAC) 2001 Domestic Violence in Native American Communities. *Domestic Violence, Sexual Assault & Stalking Prevention and Intervention in Rural Native American Communities*, Native American Circle, Ltd.
<http://www.nativeamericancircle.org/pdf/NACHandbookComplete.pdf>
(2006年7月2日最終確認)
- NiCarthy, Ginny and Sue Davidson 1989 *You Can Be Free : An easy-to-read handbook for abused women* Seal Press, Washington (=2000 むらさき工房訳『夫・恋人の暴力から自由になるために』〔新装版〕パンドラ)
- Norton, Ilena and Spero Manson 1995 A Silent Minority: Battered American Indian Women. *Journal of Family Violence*, 10(3): 307-318.
- Perry, S. W. 2004 *American Indians and Crime*. A BJS Statistical Profile, 1992-2002. U.S. Department of Justice, Office of Justice Programs. December 2004, NCJ 203097.
<http://www.ojp.usdoj.gov/bjs/pub/pdf/aic02.pdf> (2004年12月23日掲載, 2006年4月

30日最終確認)

- Russell, George 2000 *Native American FAQs Handbook*. Masterpiece Publishing, LLC.
- Sacred Circle 2003 *Domestic Violence Resource Booklet*. Sacred Circle.
- Smith, Andrea 1999 Sexual Violence and American Indian Genocide. Nantawan Boonprasat Lewis and Marie M. Fortune (eds.) *Remembering Conquest: Feminist/Womanist Perspectives on Religion, colonization, and Sexual Violence*. The Haworth Pastoral Press.
- Tjaden, Patricia and Nancy Thoennes 1998 *Prevalence, Incidence, and Consequences of Violence Against Women: Findings From the National Violence Against Women Survey*. National Institute of Justice Centers for Disease Control and Prevention, Office of Justice Programs, U.S. Department of Justice. NCJ 172837. <http://www.ncjrs.gov/pdffiles/172837.pdf> (1998年11月掲載, 2006年4月30日最終確認)
- U.S. Census Bureau *Census 2000 Brief*. The American Indian and Alaska Native Population:2000. C2KBR/01-15. <http://www.census.gov/prod/2002pubs/c2kbr01-15.pdf> (2002年2月掲載, 2006年7月2日最終確認)
- Valencia-Weber, Gloria and Christine Zuni 1995 Domestic Violence and Tribal Protection of Indigenous Women in the United States. *St. John's Law Review*. (69)61:69-178.
- Ybanez, Vicki n.d. 2001 *Cangleska, Working Against Domestic Violence on the Pine Ridge Reservation*. Praxis International.
- Yoshioka et al. 2003 Social Support and Disclosure of Abuse: Comparing South Asian, African American, and Hispanic Battered Women. *Journal of Family Violence*, 18(3), 171-180.

Domestic Violence and Traditionalism:

A Study of Advocates' Interpretive Framework of Domestic Violence in Native American Communities

KUWAJIMA Kaoru

(The University of Tokyo)

Recently, there has been an increase in the community responses against domestic violence among the Native American communities in the United States. The Pine Ridge Reservation (Oglala-Lakota Nation) in South Dakota is a leading example. It is known nationwide for its comprehensive approach to domestic violence. As community members and women advocates of this tribe have tackled this issue since the late 1980s, they have produced a series of unique interpretations of domestic violence through various media. These advocates, as well as some other Native American ones in other communities across the U.S., attribute the causes of domestic violence to colonialism, proposing a restoration of Native American traditions as the solution.

This study focuses on the interpretive framework presented by these advocates who understand domestic violence differently from many people in mainstream American society. As its data source, this paper draws on materials, including reports, pamphlets, manuals, posters, and other media, that were gathered primarily from two organizations working towards ending domestic violence in Duluth, Minnesota and on the Pine Ridge Reservation.

This paper argues that Native American advocates interpret domestic violence issues in relation to their histories of being colonized and thus, that Native Americans' experiences of domestic violence are related to their identities as a Native American. To solve domestic issues in their communities, these advocates stress the importance of decolonization and the restoration of a traditional belief system in which women are sacred, just as they appropriate some social resources commonly used in mainstream American society.

In the case of the Oglala-Lakota Nation, for example, native advocates work for es-

establishing a tribal domestic violence code and a tribal criminal justice system—an effort that both borrows tools commonly used within mainstream American society and coincides with the Oglala-Lakota tribal interests in sovereignty.

In sum, the interpretive framework engaged by these advocates treats domestic violence as more than an event that happens to individual women. Rather, it situates domestic violence in ethnic and historical contexts that demand attention to decolonization, the restoration of Native American traditions, and tribal sovereignty.

Key words : domestic violence, Native American, advocate, tradition, interpretation